2人の子失った狩野さん 意見陳述

裏山に避難させず「明らかに人災」

大川小津波訴訟の控訴審で原告の狩野正子さん(44)が29日、意見陳述した。「子どもたちは明らかに人災で亡くなった」

5年の長男達也君=当時(11)=、2年の長女美咲さん=同(8)=を失った。

東日本大震災後、自宅で2人の勉強机を見ては涙を流し、無事を祈った。「達也が見つかった」。義父の一報で、大川小へと急いだ。達也君は毛布に包まれ、青いビニールシートが掛けられていた。何度も体をさすり声を掛ける。目を開けることはなかった。

狩野達也君

震災翌月の2011年4月、美咲さんが水に浮いた状態で見つかった。壊れそうな気がして、体に触れられなかった。「美咲にずっと会いたかったんだよ。浮いてきてくれてありがとう」。優しく声を掛けた。

震災直前の出来事で忘れられない記憶がある。

3月10日朝、台所で達也君が「また大きな地震が来る。学校にいたら危ないから行きたくない」と訴えた。前日に校内で地震に遭い、校庭へ避難していた。

あの日の朝。両手を広げた狩野さんの胸に美咲さんが飛び込み「お母さん大好き」と抱き付いてくれた。

狩野美咲さん

わが子の死を受け入れられない日々。「なぜ、先生たちが裏山に避難させなかったのか」と疑念を抱き、市教委が助かった児童から聞き取った証言メモを廃棄したという話に憤った。狩野さんは夫婦で訴訟に加わった。原告の中には「もう一度お父さん、お母さんになりたい」と不妊治療に望みを託す遺族がいる。

大川小では児童4人の行方が今も分からない。「お帰り」。そう言って子どもを抱きしめる光景をずっと思い描く原告もいる。

狩野さんは法廷に声を響かせた。「わが子を失った悲しみや苦しみなどを二度と味わうことのないような学校にしてほしい。声を上げないと闇に埋もれる事実もある」

大川小控訴審初弁論

事前防災 焦点に

高裁、「備え」説明求める

東日本大震災の津波で死亡・行方不明になった石巻市大川小の児童23人の19遺族が市と宮城県に約23億円の損害賠償を求めた訴訟の控訴審第1回口頭弁論が29日、仙台高裁で開かれた。控訴審では津波の予見可能性などに加え、市教委や当時の校長らによる事前防災の在り方も争点となる見通し。

(30面に関連記事)

石巻市側 生存教諭の書面尋問申請へ

主な争点と地裁判断は表の通り。初日は法廷で遺族6人が子どもを亡くした思いを述べた後、今後の進行を非公開で協議した。

遺族側によると、高裁は市と県側に、市教委が震災前に①各学校の危機管理マニュアルを確認し不備を是正させていたか②マニュアルの周知など必要な措置を校長に指示していたか―などの説明を求めたという。

学校保健安全法29条は各学校に対し、危機管理マニュアルの作成や内容の周知などを求めている。高裁はマニュアルの運用状況や実効性に着目し、市教委や学校の組織的な対応が適切だったかを判断する可能性がある。

一方市側は、唯一生き残った男性教務主任の書面尋問を申請する意向を示したが、遺族側は「書面は信用性が低い」と反対する方針。教務主任は心的外傷後ストレス障害(PTSD)の治療中とされる。

津波の予見可能性について、遺族側は控訴審で大津波警報発令時点など「より早い段階で可能だった」と主張。市側は「津波情報を得たとしても、事前の想定を超える襲来は予見できない」などと反論している。

仙台地裁は昨年10月、教員らは襲来約7分前までに津波を予見できたと認定。「裏山に避難させるべきだった」と教員の過失を認め、計約14億2660万円の賠償を命じた。双方が判決を不服として控訴した。

大川小では児童74人と教職員10人の計84人が死亡・行方不明になった。

大川小津波訴訟控訴審の主な争点

	遺族側	市・県側	地裁判決
事前の備え	危機管理マニュアルに適切な避難場所を明記せず、不十分な内容のまま放置した	大川小は津波浸水予想区域外。津波を想定したマニュアルに改訂せずとも違法ではない	震災前は津波の危険が予見できず、マニュアルに関する注意義務の違反はない
予見可能性	午後3時10分までに大津波警報発令などがあり、津波を予見できた	当時得られた情報から想定を超える規模の津波は予見できなかった	午後3時30分ごろに市広報車が高台避難を呼び掛けた時点で津波を予見した
裏山への避難	裏山などに避難すれば全児童を救えた	余震が続く中、多数の児童と高齢者を裏山に避難させるのは危険	7分以上の余裕があり、容易に登れる裏山に避難させる義務があった
事後対応	捜索や事実解明を怠るなど一連の対応で甚大な精神的苦痛を受けた	市側の対応に違法性はない	注意義務の違反はない

大川小控訴審初弁論

「組織の責任認定を」

遺族 事前防災の注視歓迎

控訴審第1回口頭弁論を終え、記者会見する原告団の今野団長（左端）＝29日午後4時15分ごろ、仙台市青葉区の仙台弁護士会館

石巻市大川小津波訴訟の控訴審が29日、仙台高裁で始まり、遺族は高裁が「事前の防災体制」に焦点を当て、主な争点に浮上したことを歓迎した。一審仙台地裁判決は「事前の備え」を免責しており、仙台市内で記者会見した遺族は「亡くなった教諭個人ではなく、市や県の組織としての責任を認定してほしい」と口々に訴えた。

6年の長男大輔君＝当時（12）＝を亡くした原告団長の今野浩行さん（55）は「現場にいた教員個人の責任を超える事案と判断し、（震災当日不在だった）校長らの責任を議論のテーブルに載せた」と高裁の指揮に手応えを感じた様子。「最後までやるしかない」と覚悟を口にした。

3年だった長女未捺さん＝同（9）＝を亡くした只野英昭さん（45）は「なぜ51分間避難しなかったか。この『なぜ』は危機管理マニュアルの不備と密接な関係がある。大川小は法律で求められた対応を全くしてこなかった」と批判した。

「学校の先生、特に校長は市民より高い危機意識が求められる」。3年の一人息子、健太君＝同（9）＝を失った佐藤美広さん（56）はそう指摘し、「学校運営の方法などが審理される見通しになり、うれしい。マニュアルの不備が明らかになるのではないか」と期待を込めた。

亘山紘市長は「犠牲になられた方々とご遺族に改めて深く哀悼の意を表する。代理人、県と協議しながら真摯に対応したい」、村井嘉浩知事は「学校設置者の市、代理人と協議しながら、主張すべき点はしっかり主張していく」との談話を出した。

子どもを亡くした思い 遺族が法廷で語る

中村次男さん（42）

中村香奈さん

3年だった一人娘の香奈さん＝当時（9）＝を失った

真実を正直に話して

おかず一つ選ぶにしても、香奈の意見が一番。香奈中心の生活でした。対面した遺体は優しい顔をしていました。何度も名前を呼びました。返事がないのに、声がかれても呼び続けていたのを覚えています。

一審判決後、市が控訴すると聞いた時の衝撃は計り知れませんでした。最愛の子を失った悲しみに打ちひしがれ、市長の「宿命」発言など事後対応の不備にもとても傷つきました。わが子がどのように亡くなったのかを知りたい。市や市教委は真実を正直に洗いざらい話し、きちんと対応してほしい。

震災から6年。娘が生きていれば晴れて高校1年生。これからが楽しみな年頃でした。毎日、残念で残念で悔しい。

今野ひとみさん（46）

今野大輔君

6年だった長男大輔君＝当時（12）＝を失った

息子に「謝罪」報告を

3人の子どもを津波で亡くし、もう母ではなくなりました。心も体も空っぽですが、一つだけずっと心に響いている言葉があります。「津波が来るから山さ逃げよう」。震災当日、息子の大輔が校庭で先生に叫んでいた言葉です。

息子は助かりたくて必死でした。息子が亡くなり百か日の頃、海で溺れる夢で目が覚めました。こんなにも苦しくつらかったんだ。代われるなら代わってあげたいと自分を責め続けました。

子どもでさえ裏山への避難を訴えていたのに、先生が津波を予見できないのはおかしい。「大ちゃんは間違ってなかった。山に逃げたら助かった。もう安心して、先生たちも謝っているよ」と早く報告したい。それがただ一つの願いです。

佐藤和隆さん（50）

佐藤雄樹君

6年だった三男雄樹君＝当時（12）＝を亡くした

子どもでも津波予見

息子の雄樹は「ここに居たら死ぬ」と担任に泣きながら必死に訴えていた、と助かった同級生から聞きました。子どもですら津波を予見していました。

行政や教育関係者が今も「津波は予見できなかった」と言い続けていることが信じられません。裁判とはいえ、立場に関係なく子どもの命と向き合ってほしい。特に市長や知事、教育委員会に強く訴えたい。なぜ大川小は、他の学校が実施していた避難訓練をせず、避難マニュアルも未整備だったのか。あの日、先生たちが避難を迷ったのは、事前の備えを怠ったからではないか。あの日の子どもたちの姿を思い浮かべ、子どもたちの命を中心に考え、高裁での審理を進めてほしいと願っています。

紫桃隆洋さん（52）

紫桃千聖さん

5年だった次女千聖さん＝当時（11）＝を失った

学校防災向き合って

一審では津波の予見可能性に議論が絞られましたが、それだけでは不十分。控訴審は学校の在り方にまで踏み込んでほしい。

宮城県沖地震の発生が懸念される中、当時の校長は防災マニュアルをきちんと整備せず、津波避難訓練も実施しませんでした。

震災当日、津波を予見したのに先生が動けなかった事実は、学校防災上、危険な問題をはらんでいます。管理体制の不備が当日、何もできず、大川小の悲劇につながったのではないでしょうか。

高裁判決は学校防災に向き合い、第二の大川小を決して出さない礎となる内容であってほしい。短かったけれど、娘の千聖の生きた足跡が未来の希望につながる判決を期待しています。

鈴木実穂さん（48）

鈴木巴那さん

鈴木堅登君

6年だった長男堅登君＝当時（12）＝を亡くし、4年だった長女巴那さん＝不明当時（9）＝の行方が今も分からない

市教委の対応不誠実

あの日から娘巴那の亡きがらにも会えず、本当に死んでしまったのか確固たる証拠もないまま6年が過ぎました。区切りも節目もありません。意識して感情のスイッチをオフにしなければ、日常生活

震災3カ月後、市長は「宿命」という言葉を突き付けました。市教委の対応は不誠実で、話し合いを重ねることに不信感が募る一方でした。遺族は深く傷ついています。一連の遺族への事後対応の注意義

唯一生還した男性教諭に伝えたい。つらいのは先生だけではない。先生が語ることで今後の学校防災に生かされ、救われる命もたくさんあるはずです。犠牲者への供養として、立ち上がる勇気を持って